

遅くに人生を学ぶこと：バーナード・マラマッド 「かつら」に見る女性の人生とハゲ

著者	米塚 真治
雑誌名	大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要
巻	21
ページ	115-131
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006865/

遅くに人生を学ぶこと

ーバーナード・マラマッド「かつら」に見る女性の人生とハゲ

米 塚 真 治

キーワード：ユダヤ系アメリカ文学、女性登場人物、短編小説、フェミニスト、
家族問題

要旨

バーナード・マラマッド (Bernard Malamud, 1914-86) のフィクションがフェミニストの関心を惹くことはめったにないが、晩年の短編小説 “Alma Redeemed” (1984)、“In Kew Gardens” (1984-85) そして「かつら」 (“A Wig,” 1980) などは、女性主人公の存在によって特徴付けられる。「かつら」のヒロインであるアイダは、中年の依存的な女性だ。彼女は夫の死により、自力で加齢や容姿の衰えの恐怖に対処しないといけなくなる。薄毛が、彼女の主な懸念である。薄毛の不安は、アイダと能天気な夫とわがままな娘エイミーとのあいだの口論の源になった。しかし、自己発見のプロセスを通して、その不安はアイダが娘や亡き母への共感を育てていくことも助ける。遺伝、母娘関係、家庭内の抑圧と無力感、女性の抵抗、性と再生産といった問題が、この論文で論じられる。

はじめに

「かつら」は1986年に亡くなったバーナード・マラマッドが1980年に発表した短編小説です¹。マラマッドは、家族が患った精神病や心臓病が遺伝として自身にも現れることをつねに心配していました（実際、後者は現れてしまうのですが）²。といって、遺伝がなければいいというわけでもありません。核戦争の恐怖がアポカリプスへの関心と大量のSFを生み出した時代に、マラマッドが生前最後に出版した長編小説『コーンの孤島』 (*God's Grace*, 1982) もSF仕立てでしたが、そこでは人類の正・負の遺産が、核戦争を生き延び

1 初出 *The Atlantic*, vol. 245, no.1, Jan 1980. 33-36.

2 フィリップ・デイヴィス (Philip Davis) の伝記によれば、作家の母親と弟は統合失調症を患い、父親と弟は致命的な心臓病を患いました (デイヴィス 2015 : 45-46, 145, 153)。本人も1970年代後半から狭心症を患い、鬱にも対処する必要がありますが生じます (デイヴィス 2015 : 544-546, 572)。

た生物に伝わるかどうかは作品のテーマになりました。遺伝だとか広義の遺産の継承だとかいったテーマは、「かつら」でも大きな比重を占めています。

離婚こそしていないものの、本人の度重なる不倫によって、作家の結婚生活は「びりびりした」(デイヴィス 2015: 544)ものになっていました³。結婚とは、結婚と人生とは、と振り返って考察することも、「かつら」のテーマです。そこにユダヤの権威主義の再検討が含まれるのは、「ユダヤ性とはなにか」をずっと考えてきたマラマッドらしいと言えるでしょうが、フェミニスト批評的な視点も読み取れる点は、彼にしては意外かもしれません。初期から一貫して、客体としての女性、性的対象としての女性を描いてきた作家ですから。

女性を主人公にした作品が晩年にいくつか見られることは、作家が大学でヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) の講義を行ったことと関連があると考えられています⁴。「かつら」には、女性の学習性無力感とか受動性とかを読者に意識させずにはおかない女性主人公が登場します。もっとも、受動性そのものは、マラマッド作品の伝統的なテーマです⁵。それに、人類学者のエマニュエル・トッド (Emmanuel Todd) が分析するような、ユダヤの家族の中で女性が占める地位の曖昧さ (トッド 2008: 119-121) や、ユダヤの権威主義的家族と北米を含む「アングロ・サクソン世界」の「絶対核家族」との差異 (トッド 2008: 108; 164) を思えば、この議論は作家がそれまで棚上げにしてきた本質的な議論であったのかもしれませんが (その結論がどうなるかはともかくとして)。

マラマッドの晩年作品については、健康の衰えとともに創作力が衰えたことがしばしば指摘されるのですが (Solotaroff 1989: 114)、面白いものも少なくありません。1982年の心臓手術中に起きた脳卒中で、言語能力に深刻な障害を負ってからでさえ (デイヴィス 2019: 563-568)、自身の人生を重ね合わせるかのようなテーマで、独特な面白さを持つ作品を書いています⁶。視点人物の忘却や抑圧や自己韜晦や飲み込みの悪さが目立つ、

3 ある知人はマラマッドが「自分の性的能力を確認するため」に「女性を必要とした」と証言しています。妻アン (Ann) も夫が特に晩年、女性たちと会う「自由」を求めたことを証言しています (デイヴィス 2015: 488-489)。

4 1979年に勤務先のベニントン大学 (Bennigton College) で行われた連続講義。Lucio Ruotolo は、「あまり愛らしくない女性」を作品中でどう扱うかについて、作家が「自身の経験の欠如」を埋めようとしたと論じています (Ruotolo 1994: 329)。

5 女性と自己中心的な男性の組み合わせ、という設定についても同様なことが言えます。

6 Ruotolo は、マラマッドがウルフ研究によって「自伝的エッセンス」という執筆理論を習得し、ウルフやアルマ・マラー (Alma Mahler, 1879-1964) をモデルにした伝記的短篇の執筆に役立てたと指摘しています (Ruotolo 1994: 330)。作家は先立つ長篇『ドゥービン氏の冬』(Dubin's Lives, 1979) 執筆中に、ニューヨーク精神分析研究所の伝記研究のグループにも参加しています (デイヴィス 2015: 571)。

言い換えれば、作中に伏線を張っておいて回収するプロセスが多用されるのも、晩年作品の特徴であるように思えます。以下のクロス・リーディングは、マラマッド晩年作品の再評価という意味でも読んでいただけると嬉しいです。

先行研究

「かつら」はあまり話題になることがなく、死後出版を含む「全作品を初めて包括的に論じた」とダストカバーで謳われている Edward A. Abramson (Abramson 1993) でさえ、まったく言及されていません。

Robert Solotaroff はマラマッドの全短編を論じた著書のなかで「かつら」を取り上げ、主人公である母アイダ (Ida) が二十代の奔放な娘エイミー (Amy) に抱く嫉妬と、夫の死後に起こる二人のあいだの「性的競争」に着目したうえで、娘に兆す衰えがこの競争をイーブンに持ち込む可能性を指摘しています (Solotaroff 1989 : 119-120)。Lucio Ruotolo は、母アイダに抵抗する娘エイミーの視点から、母親の「老いへの恐怖」に短く言及しています (Ruotolo 1994 : 339)。

しかし、夫をたんに「呑気 (easygoing)」と解する一方で女性同士の争いに焦点を当てる Solotaroff の見解には、認知のバイアスがかかっていないでしょうか？ また、Ruotolo のいう「老いへの恐怖」が、夫と妻では異なることも、作家は (明確に問題化しているとまでは言えないものの) 描き出しています。本稿では、夫の死後よりも生前の夫婦関係に比重を置くとともに、母親アイダの視点から、母娘の異質性よりは類似性を描き出してみたいと思います。

イライラ

小説は、「壮健でまだ魅力的」(222)⁷な50歳の女性アイダが、28歳の未婚の娘エイミーにイライラする場面から始まります。理由のひとつは、娘の生き方が、早くに結婚し出産した自分とは対極にあるからです⁸。

アイダは娘が「子供の頃から道を外れている」(222)と断定しますが、その極端な断定に値するほどの根拠は示されません。並行恋愛しているとか不倫しているとかいう情報はなく、書いてあるのは、最近男友達との同棲を解消して自宅に戻ってきたこと、他にも同棲経験があるらしいことだけ。母親は、未婚で同棲したのが不道德だと責めているわけで

7 以下、ページ表記は Penguin Twentieth-Century Classics 版 *The People and Uncollected Stories* (1992) による。

8 母娘の「性的競争」という Solotaroff (1989) の枠組みによれば、娘がアイダの性的能力の自覚に脅威と不安を与えるゆえに、アイダはイライラしているということになります。

もなさそうです。というのも彼女は「娘は勤めている貿易会社の社長に気に入られているのに、寝ようとしなない」(222)、つまり、誘惑してモノにすればいいのに、とずいぶん打算的なことを独白しているからです。家に戻ってきたことのほうが、母親には問題なのかもしれません⁹。

「道を外れ」ることを「どの時点から自分が予見し始めたかは定かでない」(222)というので、娘がそうなることは予見できていた、あるいは実態がどうあれ、母親にはそう見えてしまう運命にあったようです。

母と娘のあいだに大きな喧嘩があったようにも見えません。言い合いとしては、「彼と気持ちに通じない」(222)と破局の理由を説明する娘に対して、「なんでそんな基本的なことがわかるのに二年もかかるのよ」(222)と母がなじることぐらい。娘は「私は学習が遅い」(222)と説明しますが、ここは娘の言い分に理がありそうです。いったん通じたからといって、どんな局面でも通じるかどうかは、長期間暮らさないとわからないわけですから。

むしろ気になるのは、視点人物でもある母親がこの話を語り始める直前に、「50歳なんて、なによ。49より一つ多いだけじゃない」(222)と呟いていることです。「まだ魅力的」(222) [傍点引用者] とは書いてあるけれど、この母親は自分自身の加齢に対する不安を、娘に投影して八つ当たりしたいのかな、と読者は見当を付けるでしょう。

書き出しでほかに印象的なのは、母親が「真剣にコミット」(222) することの価値をやけに強調する点。彼女は20歳で身を固めた自分の人生を、娘をだしにして正当化したいのではないのでしょうか？ そうまでして正当化するには、それなりの動機があるはず。彼女の結婚生活は、夫と「話が通じて」いたのでしょうか？ 彼女は、娘の恋愛が長続きしないのは娘が「満足しない人だから。いや、むしろ人を満足させられない」(222) からだと推測しています。相手を「満足させ」ることに、恋愛や結婚の要諦を置いているようです。では母親自身は、満足を得ていたのでしょうか？ この話は、それを母親自身が振り返り、娘の言葉を借りれば「ゆっくりと学習」(222) していくものになります。

冒頭で触っている「自分の短髪」(222) がそれとどう関わっているかも、彼女は「学習」していくことになるでしょう。事実、彼女はなぜか「娘と話しながら自分の髪のことを考えて」(222) おり、さらには「自分がこんなに心配していることを、娘は気づいていないのではないか。気づいていても特に気にしていないのか」(222) と、容易には理解しがたい憤りを感じている様子なのです。ふつう、こんなときに娘の人生でなく自分の髪心配

9 歴史学者のステファニー・クーンツ (Stephanie Coontz) は、1950年代に性のダブルスタンダードが成立したことを指摘しています。性が抑圧の対象から封じ込めの対象へと変わり、それに伴って、権謀術数を駆使して男性を挑発しつつブレーキをかける責任が女性のみにも課される。他方で、男性には性的攻撃性が許容される、というダブルスタンダードです (クーンツ 1998: 69-70)。冷戦期的な読みといえるでしょう。

をするものでしょうか？

支配する夫

要するに主人公アイダはハゲに悩んでおり、「短髪」はハゲをなるべく目立たなくするためのヘアスタイルだったのですが、彼女の頭髪の歴史と、薄毛をめぐる夫とのコミュニケーションには、彼女の人生と結婚生活のありようが凝縮されています。

彼女は数年にわたり薄毛に悩んでいたようですが、作品に描かれている限り、夫マーティン（Martin）にちゃんと話を聞いてもらえたのは、頭頂部がハゲていることを発見した当日と、夫の生涯最後となる日の前日の二回だけです（途中でも一度相談しますが、軽く流されます。夫の生涯最後の日には三者面談ですが、基本的にアイダと娘が対話しています）。

ある日、ヘアブラシに残る抜け毛の量がいつにも増して多いことに恐怖した彼女は、鏡を見て、頭頂部が「事実上ハゲている」（223）ことを発見します。ヘアスタイルによる物理的影響が、真っ先に疑われます。彼女は長年にわたり頭髪を「きついお団子」（222）にしており、それは「健全かつセクシー」（222）な髪型を望む夫の好みに合わせたものであったので、彼女はお団子ヘアを止める許可を夫から得ようとします。しかし「きついお団子が薄毛の原因」（223）ではないかという妻の意見を、夫は「ナンセンス」（223）と一蹴する。アイダには基本的に自由がないのです。

夫は襟足フェチなのかもしれません。「自分だけにわかる範囲のセクシーさ」を妻に要求する夫は往々にしており、それを制度として要求する文化も世界には存在します。また、「三つのセルロイドのヘアピン」（222）で留めているという、アイダのヘアスタイル自体の拘束性は無視できません。夫が彼女に求めているもの、二人の関係性がどのようなものかを象徴しています。

夫は、薄毛に何か原因があるとすればホルモンのせいだと答えるのですが、対策の助言を求められると、洗髪を減らせというので、原因と対策とが対応していません。ホルモンのせいだという理解は正しいでしょう。ゆえに、根本的な対策がないせいで、夫は気休めを言っているのかもしれません。しかし、たんに自分好みのヘアスタイルを止めさせたくなかっただけかもしれない。しかも、「そもそもおまえは洗髪の回数が多すぎる」（223）と繰り返し、妻自身に非があるように言うので、たちが悪い。髪がべたつくタイプなので最低二週間に一回はシャンプーする必要がある、と妻が申し出ると、「もっと減らせ。俺のアドバイスを聞け」（223）とさりげなく権威主義的な暴言を吐きます。

さらに困るのは、「すごく怖い」（223）と訴える妻に「無用な恐怖だ。[薄毛は]よくあることだ」（223）と答えていること。共感を求める妻の気持ちに答えていません。女性の相談事を聞く男性に「よくある」ケースですが、なぜ男性である夫にとって妻の恐怖が「無用」に見えるのかについては、あとで改めて検討します。

「よくあること」という主張と、洗いすぎによる特殊なケースだという主張（客観的に見て、洗いすぎとも思えませんが）も矛盾しており、その場しのぎに妻に応答している印象は免れません。妻に対する支配だけがあって、顧慮やケアを提供していないのが印象的です。いずれにしても、お団子にしていたのは「四十代半ばまで」（223）というので、その後にアイダは夫の許可なくお団子ヘアを止めたようです¹⁰。

思考放棄

アイダが夫に二回目の相談を試みるのは、短髪にいわゆる「前髪ぱっつん」のスタイルに変えてからのことです。短髪にしてもなおシンクの排水口に流れ落ちていく毛の塊を見て、彼女は失神しそうになります。ピンク色の頭皮がいよいよ明瞭になったことを、鏡に写して確認し、夫に助けを求めるのですが、軽く流されます。「そんなに目立つとは思わない」（224）、「以前より薄くなったのは事実だが、誰もがそうなる」（224）、この髪型なら自分は「おかしい点には気づかない」（224）と。個別の相手への共感がどこにも存在せず、一般化と自己中心性にみちた夫の回答を、妻がどう思ったのか書いてありませんが、彼女は以前に夫からもらった助言を忠実に実行し、シャンプーする回数をさらに減らします。

しかし「鏡」と同等の客観性が欲しかったのか、夫の助言に不満があったのか、彼女はまもなく皮膚科に行き、医師の診察を受けることに。頭皮に「刺激を与える」（224）と称して医師が「でっち上げた」（224）いかがわしい溶液を処方されます。成分はアルコール、蒸留水、ビーバーの分泌物であるカストリウム。

溶液が効くはずもなく、頭頂には「朧月に雲の影がたなびく」（224）滑稽な風景が現出します。塗る直前に成分をシェイクして脱脂綿に浸し、髪を一房ずつかき分けて頭皮に塗り込む。医師から指示された手順を馬鹿正直に実行すればするほど、本心との乖離、現実との乖離、本人の受動性が際立っていくようです。頭皮はいよいよ光り輝き、彼女は「自分を見たくなくなり、考えるのを止めたくなくて」（224）、夫に再び相談するのです。しかし、彼女はいつもそうやって依存してきたのではないのでしょうか。自分で考えたくないから夫に尋ねるという形で。

続く夫の答えは、実に不誠実なものです。「いったいどうすればいいの」（224）と答えを「懇願する」（224）妻に、夫は「医者を変えることは考えないのか。そいつは薬を売ることばかり考えている」（224）と言い放ちます。自分ではない男性に相談したのが、気に入らないのかもしれませんが。続けて「俺は今でも、頭皮の病気とかそういうものだと思っているよ」（224）と言明します。いったい夫は前にいつ、皮膚病原因説を口にしたのでしょ

10 Solotaroff (1989)の枠組みによれば、短髪である娘エイミーへの競合意識も考えられるかもしれませんが。しかし、ヘアスタイルを変えた時期は、それでは説明しにくいです。

うか？ 読者には初耳なのですが、彼女にも初耳なのではないでしょうか。そして、夫が批判している医師の見立てと夫の見立てに、いったいどんな違いがあるというのでしょうか。医師の見立てを繰り返しているだけではありませんか。これは彼女の思考放棄による自業自得という側面もあります。しかし、学習性無力感を自業自得と切り捨てるのは酷かもしれません。

「頭皮のケアをいくらしても、よくならないの。薬を付けてケアしても、薬無しでケアしても」(224)と訴えるアイダに、マーティンは問います。「おまえはいったい何のせいだと思っているんだ？」(224) ここで初めて、彼女自身の考えが問われるわけです。夫が「精神的なトラウマとか、肉体的なトラウマとか」(224)と選択肢を挙げると、彼女は「遺伝かもしれない」(224)、父親の頭皮を受け継いだのかもしれない、と別の答えを言います。原因はトラウマではなく遺伝だ、と言っているように聞こえますが、実はアイダにとって、トラウマと遺伝は意識下でつながっています。意識上でつながれば「正解」に至るはずですが、抑圧が深いようで、この段階ではまだ至りません。ともあれ夫は大きなヒントを与えています。いいところをたまに突いてくるのが、このろくでもない夫の厄介なところですよ。

愛玩の対象

このあと夫婦のあいだで、彼女の父親は実際にハゲていたか、いなかったかと議論になります。「もじゃもじゃの髪」(224)だった夫との初対面当時の年齢から、今のアイダと同じ年齢に至るまで、計算上は十年前後しか経過しなかったはずですが、その間に彼女の父親が頭髮の量を急に減らした様子がうかがえます。

その直後に夫は、本人としては励ましの言葉、彼女にとっては暴言を吐きます。その年齢でも君の父親は「女たちの尻を追いかけて回していた」(225)。「髪があろうが、なかろうが」(225)、その要因は彼を止めはしなかったと。ここから、男性のハゲと女性のハゲへの許容度がなぜ違うかについて、作家なりの（不完全ではあるけれど）考察が始まります。

夫にとって、肝腎なのは当人が不特定多数の異性に対して性的活力を発揮できるかどうかなので、前述の言葉は、主観的には妻への励ましを意図しています。他方、外見の衰えによってマーティンという特定の男性からの愛玩価値を失うことを恐れる彼女にとって、彼が不特定多数と浮気する可能性を想起させるこの言葉は、神経を逆撫でする言葉にほかなりません。

「よりによってこんな時に、その話題を出すなんて、あなたは父に嫉妬しているんでしょ」(225)と、妻は夫の浮気心を試す言葉を口にしします。しかし、「よりによってこんな時に」の意味を夫は理解しないので、いわば種付け馬的な観点を維持し、嫉妬だとか「経験の範囲」(225)だとかについて語るのは止めようと提案します。どうやら夫は、20歳そこそ

こで結婚した妻が、自分と比べて異性経験が少ないことに劣等感を持っている、と誤解したようなのです。「止めよう、さもないと別のカードゲームになる」(225)と夫が続けるのも、経験人数を問題にしている証です。経験人数が多い方が勝ちだという前提。

すると妻のほうは娘のエイミーを引き合いに出し、「経験の範囲」(225)に関して、あなたはエイミーの「奇妙な人生」(225)に嫉妬していると感じることがある、と言います。妻のほうは、やはり夫が浮気するかどうかを気にしているため、二人の論点はすれ違い続けます。

夫は自分の経験人数が妻よりも多いという不均衡を前提に話しているが、妻は必ずしもそうは思っていない。少なくとも、結婚前の夫の経験人数は問題にしていなかったことがうかがえます。また、エイミーの話題に「その話も止めよう。無益だ」(225)と反応する夫が、妻とは違い、娘の男出入りに危機感のようなものを抱いていないことも分かります。

「じゃあ、いったい何の話なら、していいの？」(225) おまえの髪のことだろう、と答える夫に、髪ことは話したくないと妻は答え、相談は終了します。文化人類学者でDV被害者の支援活動にも携わっている沼崎一郎が指摘するように、依存と愛玩によって形成される関係性は支配関係であって、親密圏ではないこと。また、支配関係が不均衡の意識を前提に成り立っていること(沼崎 2019:155-160)。それらがひしひしと伝わってくる問答です。

性的活力

しかし、ここで話題になっている「性的活力」(作家自身もその証明に拘っていた。デイヴィス 2015:488-489)とはそもそも何を指しているのかは、よく考える必要があります。

二度目の相談をアイダは「髪がなくなったら、女らしさを失ってしまう」(224)という言葉で始めているのですが、この言葉は、妻が初回到相談したときの夫が「細身だが鋼のような身体、波打つ灰色の髪、強そうな首」(223)と描写されているのと響き合っています。男性的魅力に溢れた夫と釣り合う外見でいたい、というアイダの外見的魅力的問題であるように、一見すると見えます。

ただ、この夫の描写が、彼がホルモン原因説を唱えた直後に置かれていることは見逃せません。実はアイダが皮膚科を受診した際にも、医師から最初に受けた提案はエストロゲン(卵胞ホルモン)軟膏の投与だったのですが、彼女はそれを断っているのです。「男性の精巣が縮む可能性はあるが、女性には無害」(224)という説明を聞き、精巣が縮むようなものを試したくない、と訳の分からない理由をつけて断ります。女性ホルモンの多い自分に触れると夫が女性化してしまう、などとは思っていないでしょうから(だったら、女らしくあろうとは思わないでしょう)、卵胞ホルモンの減少という現実に向き合いたくない、というのが、彼女が断った理由でしょう。つまり、更年期の危機です。

しかし、更年期になり卵胞ホルモンの働きが鈍ると、女らしさが失われるとは、いったいどういう意味なのでしょう？ 急に男性が寄りつかなくなったり、性交ができなくなったりするとでもいうのでしょうか。そんなわけはありません。それと比べると、「髪があろうが、なかろうが」性的活力に違いはないだろう、という夫の主張は、なんとなく分かる気はします。実際には加齢とともに容貌は衰えるし、性交にも色々と困難は生じますが、それは男女とも同じことです。

しかし、私たちが「なんとなく分か」ったつもりでいることに、本当の問題があるのではないのでしょうか。そこでいう性的活力って、いったい何なのでしょう。前出の沼崎一郎は「強い生殖力を持つことは、男性性の根幹をなす。男性の生殖力に高い価値を置く文化は非常に多い」(沼崎 2019：112)と述べ、それゆえに「男性同士の間で不能や不妊がスティグマになるような社会状況がある」(沼崎 2019：112)ことを指摘します。

アイダが抱いているような、排卵がなくなると女でなくなる、というような観念¹¹は、女性の現実根ざしているわけではありません。そうではなくて、沼崎の指摘するような「男性性」に関する観念をもとに、その陰画として導き出されているのではないのでしょうか。この観念は男女両性を苦しめます。だから、この夫の「励まし」を、「ポジティブ」と肯定するわけにはいかないのです。

沼崎は同じ著書で、男性における性と生殖の分離と、その問題点も論じています。この問題も、アイダの結婚生活と深い関わりがあります。沼崎は、性と生殖が実態として分離しにくいのはむしろ男性のほうであるにもかかわらず、男性において両者が観念として分離されがちなのはなぜか、と問います。男性は勃起や射精という生殖能力がなければ性交できず、性的快感を得られない。対して、女性の排卵は、性行為と直接の関係はありません。なのに、性と生殖が観念として分離しがちなのは男性のほうです。沼崎はそうになっている要因を1. 社会的言説 2. 医学 3. 精子の擬人化に見いだしています。1. は性と生殖を射精の時点の前後で切り離す、ポルノグラフィの類いを指します。2. は、産婦人科が女性および生殖を扱い、泌尿器科が男性と性をまとめて扱うという診療科の分離を指します。3. は精子が卵子に「突入する」、卵子が精子を「誘惑する」、精子の卵子の「出会い」といった擬人化が行われることによって、「そもそも精子が体内に侵入した原因である性交」が「妊娠から切り離され」てしまうことを指します。(沼崎 2019：103-108)。

このような性と生殖の観念的分離が、生殖の主体としての当事者責任から男性を切り離すことを可能にしている、と沼崎は分析します(沼崎 2019：109-110)。射精する主体と妊娠させる主体とは別であるとか、男性の意思から独立して精子が活動を欲している(いわゆる「溜まってる」)とか、思念されるわけです。妻アイダに対する夫マーティンの場合当たりので無責任な言動は、自由に種付けする主体だとでもいうような彼の男性観と、表

11 閉経後の女性が、次世代の子育てを手伝う形で再生産にかかわる役割を保持する—その種の家族構造は、作中で明示的には考慮されていません。

裏一体なのではないでしょうか。

娘が心配

夫から皮膚の問題だと言われたアイダは、またも従順に、別の皮膚科を受診します。今度の医師は気休めにビタミン剤しか処方しないのですが、「治る保証はしない」(225)とはっきり告げます。俺のアドバイスを聞けと根拠もなく迫る夫より、よほど誠実とさえ思えます。原因は物理的なストレスだというのが、この医師の診断のようです。原因をめぐる説が一巡して最初に戻り、帰宅した彼女はエイミーを交えて、三者で話し合います（このときエイミーは男友達と同棲していないのでしょうか）。

この薬は飲んでも効かないような気がする、という母に対し、やってみなくちゃわからない、いや、しなくても常識でわかる、と暗に両者の生き方そのものを張り合う母娘の間答が続きます。そこに夫が「みんな、ごまかすのはやめよう」(225)と割って入り、かつらの着用を提案します。夫のこの提案は容れられず、「何個か試着したことはあるけれど、頭に負荷がかかったから嫌いだ」(225)と「告白」する母と（試着した経験を「告白」しているのか、嫌いだと「告白」しているのかは曖昧です）、「ひとりで心配して頭に負荷をかけてるんでしょ」(225)と揶揄する娘との間で口論となり、その夜、夫は心不全を起こして死んでしまいます。それにしても、なぜ「みんな」なのでしょう？

勘のいい読者なら察しが付くように、それは娘もハゲているからですが、そのオチは終盤まで明かされません。換言すれば「ずっと前に頭の中から排除した」(229)ために、母親の意識には上りません。それゆえ母親は、自分一人が薄毛に悩んでいるようなふりをするな、という娘の怒りに気づくこともなかったし、夫の死後、部屋に引きこもる娘の悩みにも気づきません。「あたし、あの子に何をしたんだろう」(226)と見当外れな自問自答をするのみです。娘はこのとき、母親のハゲが遺伝するなら父親の心臓病も遺伝するかもしれない、とひとり恐怖しているのです。作家自身と同じように。

オチが分かってから再読すると、作中に張り巡らされた伏線が目に入ってきます。言い換えれば、アイダの意識下にあるものが、いかに作用しているかが分かります。たとえば、冒頭部の「自分がこんなに心配していることを、娘は気づいていないのではないか。気づいていても特に気にしていないのか」(222)という一節がダブルミーニングになっていること。「心配」は、自分の髪のみならず、意識下に抑圧している、娘の髪への心配でもあるかもしれません。そうすると、「気付いていても」以下の文の意味は、母の「心配」にかかわらず、娘は「髪があろうが、なかろうが」(225)という父親の立場に近いのだと受け取れます。再読して伏線を回収するのも、間違いなく、この作品を読む楽しみのひとつです。

本来の自分

それはともかく、かつらの話でした。アイダが最初にかつら製造・販売店のウィンドウをのぞき込む姿が描かれるのは、薄毛を夫に最初に相談して以降の、ある日のことです。

彼女はどのかつらも「人工的」(223)だと決めつけ、並んだかつらに「軽い憎悪」(223)を感じるとさえ言います。彼女はその憎悪を「髪を失う恐怖と結びつけ」(223)る。つまり「かつらを着ければ、他人にその理由を悟られる」(223)からだと説明するのですが、かつらを着けるのはハゲの人だけなのではないでしょうか？ かりに彼女の知識ではそうであるとしても、かつらがハゲの原因になるのでもない限り、ハゲへの恐怖は、かつらに対する憎悪とは直結しません。まさか、自分がハゲなのを否定するために同類のハゲを憎悪するというようなクローゼット・ゲイじみた話でもないでしょう。かつらを嫌う理由が別にあるのではないのでしょうか？ 前述の箇所はやはり、試着経験ではなく、かつら自体への嫌悪を「告白」していたのではないのでしょうか。

代わりに彼女は帽子店に入り、夏なのに秋冬ものの帽子を購入します。人生の秋とでも言わんばかりに。それを補償するかのように、帽子には緑色のリボンが付いています（直後に「エイミーの目は緑だ」(223)という述懐が唐突に現れ、それもまた伏線だったりします。後述します）。

アイダが同じかつら店の中に足を踏み入れる様子が初めて描かれるのは、夫が急死して数週間後のことです。女らしさどころか「自分の人生」(226)そのものが「恐ろしく心配」(226)になった彼女は、自宅の鏡で全身をチェックした後、どういうわけか、かつら店に向かうのです。

ここで、彼女の過去について重要なヒントが提示されます。店内で最初に指差したブロンドのかつらは「不規則に縮れた若向きの」(226)スタイルです。ほぼ同時に指差した栗色（チェスナット・ブラウン）も高校時代の髪型に似ているといい、これらは若さを思い出させるから注目したのでしょうか、なんと大学時代に彼女は「変形アフロヘア」(226)にしていたと判明します。現在の保守的な性格からすると意外ではないのでしょうか？ 同じころに出会っているはずのマーティンが、その髪型を「健全」(222)と判断したはずはありません。嫌みの一つも言ったはず。それにしても自分と結婚したとたんに「きついお団子」(222)にさせるとは、ずいぶんな変えさせようです。

さて、三面鏡に囲まれて最初に試着したブロンドのかつらを、彼女は頭がきついからと断り、次に試着した栗色は、素材が人工であることに難色を示して断ります。スタイルが気に入ったと言って「おずおずと」(227)問い合わせる黒いかつらは、韓国製の本物の人毛だったのですが、それを聞いて「オリエンタル」(227)の人毛は「自分自身でなくなるような気がする」(227)と言い、試着もせずに断ります。

業を煮やした男性店主は「あなたは自分の本心が分かってないんでしょ。かつらにも実

は関心がない」(227)と厳しく指摘します。実はアイダがこの店でかつらを試着するのは三度目。過去に他の店員にも「試練」(227)というべき体験をさせていたことが判明します。彼女は、自分の本心は分かっている、関心はあると否定するものの、店主に今後一切の取引を断られ、店を出ることになります。店主の指摘は凶星だったようで、彼女は怒りのあまり、五分間立ち尽くす。それから頭にスカーフを巻いて歩き出し、帽子店で紫色の帽子を買って被ります(単なるハゲ隠しかというと、そうではない。これも伏線なので後述します)。

問題は、彼女が三種類のかつらについて、それぞれどの点が特に気に入らなかったのかです¹²。最初のブロンドは、「きつい帽子みたい」(226)だと感想を述べていますから、いかにも「被っています」という風で、本人の肌色や地毛の色から隔たっていたのでしょう。栗色のかつらは、本人の昔のヘアスタイルなので、おそらく似合っていたはず。店主も、こちらは櫛を入れて調整する必要をあまり感じず、彼女の決断に期待しています。しかし、彼女は頑なに店主と目を合わせようとしない。きっと、買うわけにはいかない別の理由があるから、やましいのです。「人間の髪じゃないみたい」(226)と感想を言い、店主から、そのぶん熱や湿気に強いと説明されると「人間はこれをどう手入れするの?」(227)と、謎の質問を発します。手入れ法の説明を受けても納得しません。

もしかすると、人工的に感じられるのは素材ではなく、実はスタイルなのかもしれません。つまり、自分自身の若い頃のヘアスタイルが、人工的で不自然だったと回顧しているのです。発汗して蒸れやすいかも尋ねており(店主はその心配はないと言いますが)、かつらがハゲを進行させないかも心配しているようです。

口にする理由と本当の理由が逆なのだとすると、三番目の黒いかつらに注意を惹かれた理由も逆であって、つまり本当はスタイルでなくて、その色に惹かれたのかもしれません。典型的なユダヤ系の髪の色にもっとも近いのは、この色です。彼女がこのかつらを「オリエンタル」と形容しているのも、中東系ユダヤ人(ミズラヒム)を連想させます。

さきに筆者が「自分自身でなくなる」(227)「自分の本心が分かってない」(227)と文脈に応じて訳し分けた箇所は、原文ではいずれも“stranger to oneself”です。「うまく説明できないけれど、このかつらを身につけたら、自分自身に対してstrangerだと感じそうな気がするの」(227)と語るのは、かつらが似合わないという意味ではなくて、髪が黒くなることで、本来の自分(ユダヤ人としての自分)とは隔たっている自分自身をよけい意識させられる、という意味なのではないでしょうか。その不安を予期して「おずおずと」問い合わせたのでしょうか。

12 三つのヘアピン、三面鏡、三度、三種類という数字は、アイダの人生における局面や役割を表しているでしょう。

母とわたし

この推理が当たっているかどうか、先を見てみましょう。かつら店から帰宅したアイダは、会社で知り合った男性と一、二週間後に同棲を始めると報告する娘に、八つ当たりのように意見して、口論になります。心配だから忠告するのだという母に、娘は「その心配性の心臓で、あたしまで飲み込むつもり？」(228)と切り返す¹³。母親は激怒し、やがて自室で悲しみに沈んでいきます。

ベッドで古いアルバムをめくり、娘の子供の頃の写真を探すアイダ。娘がいたいけで素直だったころの思い出に浸り、慰安を得たいのでしょうか。さらにページを繰り、ユダヤ系の自分の母親、ファイトelson夫人 (Mrs. Feitelson) の写真を目にします。そこで彼女は、自分がかつらを拒否するのは、母親の生き方への違和感と拒否ゆえだったことに気がつくのです。

母親は正統派ユダヤ教徒で、宗派のコンプライアンスに則り、シェイテル (sheitel) と呼ばれるかつらの一種を被っていました。女性の髪を性的魅力とみなし、既婚女性はシェイテルで地毛を隠すか、ティシュル (tichel) と呼ばれるスカーフ、または帽子の類で覆うのが正統派です。アイダがかつら店を出入り禁止になったあと、スカーフを巻き帽子を買うエピソードは、ここで伏線として回収されるわけです。母親のシェイテルは馬毛で、「頭の上に丸々した黒パンを載せているように見えた」(229)¹⁴。

ハゲてもいました。母親が路上で物盗りに襲われて格闘になり、かつらが取れて「うぶ毛の生えた頭蓋骨」(229)が露わに。驚いた物盗りが何も盗らずに逃げる事件があったことを、アイダは思い出します。このくだりはマラマッドお得意のコメディ調で描かれています。シェイテルと母親のハゲとのあいだに因果関係があるのか、母親がハゲをどうとらえていたのかは定かではありません。

母親は女性らしい魅力を否定しているように見えました。正統派の女性は「夫以外の男性の気を引くことがないように（かといって嫌われることもないように）」(229)身なりを制約する。その結果、「夫の気も引きにくくなることもある」(229)とアイダは観察していました。母は、娘の自分を分かってくれない人でもありました。彼女はそんな母親とは違う女性になりたかった。変形アフロヘアもそういう抵抗の一種だったのでしょう。

前出のトッドは「父の息子の関係が強調」される権威主義的なユダヤの家族で、実際には母親が「溢れるばかりの権威」を帯びている矛盾を指摘します。それは「女性は相続か

13 アイダといい夫といい、「ストレスと心臓」の件は、作家の自伝的エピソードを反映しています。

父親の心臓疾患による死が、弟の精神疾患から受けた心労によるものだったという（デイヴィス 2015：147）。

14 合成繊維を用いた多種多様なファッションウィッグが普及するのは、1950年代から60年代にかけてのことです。

ら排除されるが、宗教上の帰属を確定するのは母だけ」だからです（トッド2018：119）。権威主義的な家族では、父の権威は「意識的に高揚」させられるのに対し、母への尊敬は教育を通じて「無意識的に刺激」される（トッド2018：121）。しかし、「個人への厳しい教育の結果として強い心理的な緊張が想定される」。16世紀のドイツ文化圏で起こった魔女狩り（ドイツもユダヤも権威主義的な家族構造において共通する）は、権威主義家族で「母親は常に強い力を持っはいるが、しばしば無意識的に憎まれている」ことの帰結であって、教育の成果として起こった大衆の識字化と表裏一体のできごとだったとトッドは論じます（トッド2018：156）。アイダが見せる無意識の抵抗と抑圧は、この構造に当てはまるように見えます。トッドが別の著書で述べるように、移民の家族構造はやがて移民先の型へと移行するもので（トッド1999：99-102）、ユダヤ系アメリカ人の新しい世代が「絶対核家族」へと移りつつあるのであれば、そこにも親子の食い違いは生まれます。

アイダはおそらく大学の在学中に、結婚相手を見つけ、中退して式を挙げることで親からの独立を図った。当時、結婚による中退は珍しいことではありません¹⁵。しかし、結婚した夫（髪は黒だが、ユダヤ系かどうかは定かではない¹⁶）にふたたび支配され、彼に依存する結果となった。親から虐待された過去を持つ娘などにもよくあるケースです。

母親と違って、彼女は「女らしさ」を外見で表現しようともしました。しかし、やっぱりハゲてしまった。自分は、娘エイミーのことを分かっているだろうか？ やっぱり、分かっていない気がする。

結局、アイダは母親に似ており、母親の性質を受け継いでいるのです。地毛を性的魅力とみなすユダヤの観念も含めて。もしかするとそれが、仲良くなるべき「自分自身」だったのかもしれない。「ああ、ママ、私はママのこと分かった？ ママは私のこと知ってたの？」（229）とアイダは写真の母に呼びかけます。

娘とわたし

それでは、娘エイミーはどうでしょうか。写真を見てアイダが思い出したところによると、エイミーは12歳のころは決してスカートをはかず、つねにジーンズをはいていた。髪だけは長くしていたけれど、18歳のときにショートにした。28歳の現在まで独身で仕事を続け、「自分の身は自分で守る」（228）と語る。結婚は「選択肢」（228）であって、生存に必須の条件ではない。子どもは、いつか欲しくなったときに考える。将来を悲観も

15 クーンツによれば、アメリカでは1940年代終わりからの「逆行現象」によって「百年ぶりに結婚年齢と出産年齢が低下」し、「男女の学歴の差が開いた」といいます（クーンツ 1998：48）。

16 ユダヤの族内婚かは定かではありません。ただ、アイダとマーティンの夫婦関係は、夫婦の平等主義的な絆によって「地球上に現存するもっとも女性主義的なシステム」を作り上げたトッドが評する北米の「絶対核家族」の夫婦関係（トッド2018：179）からは隔たっています。

樂觀もしない。

これらは母親を反面教師にした結果でしょう。しかし、エイミーは「いい給料」(228)と父親の遺産があっても、住居を親と男友達のどちらかに依存しており、アイダの提案するひとり暮らしを拒んでいます。自立できているとは必ずしも言えません。「非常時に備えて貯金」(228)しており、未婚である理由を、結婚がまだ「持続可能な選択肢」(228)になっていないからと語る様子には、慎重派の一面ものぞきます¹⁷。

そして、やっぱりハゲは始めている。さきにエイミーは「髪があろうが、なかろうが」(225)の立場に近いと述べました。しかし、冒頭の言い合いの後で部屋を出るエイミーは、花瓶のバラの前で立ち止まり、花を整え、「薄れた香り」(222)を嗅いでいます。このバラは一週間前の誕生日に、女友達がくれたもの。このとき男友達との破局直後であるエイミーもまた、薄毛が自分の性的魅力にもたらす悪影響を懸念しているのかもしれません。

「みんな、ごまかすのはやめよう」(225)と父親に言われた二度目の言い合いの後では、「ふらふらと部屋を出て、鏡の前で初めて立ち止まり、自分の姿を見た」(225)。エイミーは薄毛を気にしていないというより、アイダのように過剰に悩まされたり進行を止めようとしたりすることに対して、抵抗しているのではないのでしょうか。終幕でベッド上のエイミーは、そばに立つ母の視線が頭頂部に釘付けになっていることに気づいているはず。あえて反応せず「ページをめくり、読み続ける」(229)のは、母親に対して自分なりの生き方を主張しているのでしょうか。

エイミーはアイダに似ているのかもしれません。「学習が遅い」(222)こと、自分の母親に反発することも含めて。冒頭部でアイダがなぜ娘が「道を外れるのを予見」(222)できたかといえ、それは自分もかつて外れたと意識しているからです。これは母娘二代にわたる抵抗と継承（あるいは抵抗の継承）の物語なのです。

おわりに

さて、アイダはとうとう自分自身の人生を見いだせたのでしょうか。それは、何を「自分自身」と考えるかによります。

口論の翌朝、アイダが早くに家を出て、「魅力的なかつらを自分用に買う」(229)ところで作品は終わります。たぶん出入り禁止になった例の店に、頼みこんで入れてもらったのでしょうか。この行動もアイダ自身の発想というより、生前の夫から最後に受けたアドバイスを遅ればせに実行したもの。ただし今度は、自分が手本となることで娘の役に立ちたい、というお節介も加わっているかもしれません。

17 北米の「絶対核家族」を前提にすれば、エイミーは独立すべきです。他方、ユダヤの権威主義的家族は、跡取り娘と婿取りの可能性を排除しません。代表作『店員』(*The Assistant*, 1957)に見られるように、マラマッドもその話題を扱ってきました。ここにも議論すべき論点があります。

以前、かつらの代わりに緑色のリボンがついた帽子を購入した際、アイダは「エイミーの目は緑だ」(223)と独白していました。瞳の色と、服装やアイテムの色とを合わせるのはファッションの基本です。彼女の意識下には、エイミーもハゲ隠しに帽子を被ればいいのに、という思いがあったのではないか。そして「娘の薄毛を目にして苛まれた」(229)翌朝、彼女は娘の手本となるべく、率先してかつらを身につけることにしたのでしょう¹⁸。

自分の発想を貫くのが自分らしい人生であるのか、それとも他人の役に立ったり他人を受け継いだりするのが人生であるのか。それは後者であろう。結局、かつらであろうが地毛であろうが、借り物である。人間とは遺伝であり借り物である。それが作家のメッセージなのかもしれません。マラマッドの作品を楽しめるかどうかは、このような人生観に共感できるかどうかにかかっているように思われます。

引用・参考文献一覧

沼崎一郎 (2019) 『「支配しない男」になる一別姓結婚・育児・DV被害者支援を通して』 ぶねうま舎
Abramson, Edward A. 1993. *Bernard Malamud Revisited*. Twayne's United States Authors Series No. 601.

Boston: Twayne Publishers.

Coontz, Stephanie. 1992. *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap*. New York: Basic Books. Kindle. (クーンツ, ステファニー 岡村ひとみ (訳) (1998) 『家族という神話—アメリカンファミリーの夢と現実』 筑摩書房)

Davis, Philip. 2007. *Bernard Malamud: A Writer's Life*. Oxford: Oxford UP. (デイヴィス, フィリップ 勝井伸子 (訳) (2015) 『ある作家の生—バーナード・マラマッド伝』 英宝社)

Malamud, Bernard. 1980. "A Wig." Bernard Malamud. Robert Giroux (Ed.) *The People and Uncollected Stories*. Penguin Twentieth-Century Classics. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1992. 222-229

Ruotolo, Lucio. 1994. "Bernard Malamud's Rediscovery of Women: The Impact of Virginia Woolf." *Twentieth Century Literature*, Vol. 40, No. 3, Autumn. 329-341

Solotaroff, Robert. 1989. *Bernard Malamud: A Study of the Short Fiction*. Twayne's Studies in Short Fiction No.8. Boston: Twayne Publishers.

Todd, Emmanuel. 1997. *Le Destin des immigrés: Assimilation et ségrégation dans les démocraties occidentales*. Paris: Seuil. (トッド, エマニュエル 東松秀雄 (訳), 石崎晴己 (訳) (1999) 『移民の運命—同化か隔離か』 藤原書店)

Todd, Emmanuel. 1999. *La diversité du monde: Structures familiales et modernité*. Paris: Seuil. (トッド, エマニュエル 荻野文隆 (訳) (2008) 『世界の多様性—家族構造と近代性』 藤原書店)

18 結末は「二人の闘争の解決不能性を示して」いる、つまりアイダは娘に対抗するためにかつらを購入したという Solotaroff の見解 (Solotaroff 1989: 120) に、筆者は同意しません。「苛まれた」は文字通りの意味であり、それが翌朝の行動の動機だと筆者は考えます。

Learning Late in Life: Hair Loss and Women's Lives in Bernard Malamud's "A Wig"

Shinji Yonezuka

Key words: Jewish American Literature, female character, short story, feminist, family issues

Abstract

Although the fiction of Bernard Malamud (1914-86) has rarely attracted feminist interest, his later stories such as "Alma Redeemed" (1984), "In Kew Gardens" (1984-85), and "A Wig" (1980) are marked by the presence of female protagonists. Ida, the heroine of "A Wig," is a middle-aged, dependent woman who, upon his husband's death, must cope on her own with the fear of ageing and loss of beauty. Hair loss is her main concern. The anxiety was a source of quarrels between Ida and her nonchalant husband Martin, and her wayward daughter Amy. But through the process of her self-discovery it proves to help Ida develop sympathy toward her late mother as well as her daughter. Issues such as heredity, mother-daughter relationships, domestic suppression and powerlessness, women's resistance, sex and reproduction are discussed in this essay.